

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、中国近世、宋元時代の儒学思想史に関する代表的著作である『宋元学案』（百巻）について、その文献考証・思想史観・哲学解釈などについて総合的な解明を行ったものである。

『宋元学案』は、明末清初の思想家で『明儒学案』の編纂者である黄宗羲の手抄から始まり、息子の黄百家の編集を経た「黄氏原本」を、黄宗羲に私淑した全祖望が増補修訂するが、さらに道光年間に王梓材・馮雲濠らによって最終的に編集され、ようやく刊行されることになった書物である。このように、三段階、一五〇年以上にもわたって編纂されたため、構成も極めて複雑であり、何よりも対象とする宋元時代の儒学思想史上の人物やその思想が膨大で多岐にわたり、明末に至るまでその評価も変化に富んでいることから、従来この『宋元学案』は研究資料として活用されたり、部分的にその内容が研究されることはあっても、全体的な研究は皆無と言ってよかった。本論文は、その総合的研究という意味で、当該研究史の空白を埋める画期的論考とすることができる。

本論文は序論と本論及び結論によって構成される。序論では先行研究を整理分析し、本研究の目的・意義と方法・構成が説明される。本論は、第一章「『宋元学案』の内容構成とその学術的意味」、第二章「宋学の創立と学派の形成」、第三章「北宋五子と道学の確立」、第四章「両宋の間における道学の伝承」、第五章「南宋儒学の隆盛と論争」、第六章「朱陸の後学と思想界の再構築」、第七章「元代の儒学と朱陸の合流」、第八章「党禁と雑学」の八章から成る。結論では、『宋元学案』の内容構成と学術的意味、編纂者の思想史観、哲学思想の解釈と評価という三つの面から、本論の論点をまとめている。また附録として、本論の論旨を助けるための七つの図表が添付されている。

本論文の成果の第一は、上記のような重層的編集過程と複雑な内容構成について、丹念な分析と解明を行った点である。統計分析の手法を援用して各学案の構成と引用資料を検討するなど、従来になかった文献学的研究が行われており、今後『宋元学案』を利用する者に裨益すること大と言えよう。二番目には、多くの編纂者による案語（評語）を取り上げ、その相互の関係を分析することによって、該書の重層的な性格、またそれ自体の思想史的展開を解明した点である。三番目には、『宋元学案』所収の資料と案語を検討しながら、北宋から元末に至るまでの儒学思想史の重要課題について、論者自身が分析整理を行った点である。四番目には、特に全祖望が従来の朱子学的思想史観にとらわれず、歴史の中に埋もれた思想家を発掘して位置付けた功績を具体的に検討し、高く評価した点である。このように、本論文は、『宋元学案』に関して、文献学・学術史・哲学史といった各方面から総合的な研究を行ったもので、従来の当該研究を大きく前進させたものと見ることができる。

むろん、本論文において『宋元学案』に関する全ての問題が解明されたわけではない。多くの編纂者間における思想的異同の問題、また、その社会的・思想的背景としてあった明清時代浙東学派との関係、そして『宋元学案』の成立が十七世紀から十九世紀にかけての清朝学術界の動向とどのように関わっていたのかなど、多くの解明すべき課題が残されている。本論文は、今後そうした課題を着実に解決していくための出発点として、確かな研究成果を挙げたものと評価することができる。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認める。